

# 花見の宴会は秀吉が花祥？ 「お花見」雑学



お花見の起源は奈良時代までさかのぼります。この頃のお花見の主役は桜ではなく、遣隋使が中国から持ち帰った梅の花。奈良時代に編まれた和歌集「万葉集」をみても、梅を詠んだ歌が110首に対し、桜を詠んだ歌は43首。当時の梅

の人気の伺えます。

さらに、お花見は貴族独自の文化でもありました。京の都の貴族は自分の邸宅に梅園を設け、梅を眺めつつ歌を詠む風流なお花見を楽しんでいたそうです。

平安時代に入ると遣唐使制度が廃止されたことをきっかけに、お花見の主役は桜へと移り変わります。この頃から「花」と言えば桜のことを示すほど日本人の桜好きのルーツとなりました。平安時代に編まれた「古今和歌集」をみれば、桜の歌が70首、梅が18首と桜の人気の高さを伺えます。

日本最古のお花見が開催されたとされているのは812年、京都の神泉苑(しんせんえん)というお寺で、嵯峨天皇が「花宴の節」をおこなう歌や音楽を楽しんだと伝わっています。そのため神泉苑は「お花見発祥の地」として今なお親しまれており、平安時代の趣を感じる庭を眺めながら桜見物を楽しめます。

貴族だけでなく、各地方の武士にお花見の文化が広まったのは鎌倉時代以降、貴族による優雅なお花見のスタイルも大きな変化が起こります。そのきっかけとなった人物が「豊臣秀吉」です。敵手好きとして知られる秀吉は700本の桜を醍醐山に植え、1300人もの客を招待して「醍醐の花見」を開いたとされます。秀吉は日本全国から献上された銘酒・銘菓などを振舞い、参加した女性全員に2回の衣装替えを命じるなど趣向を凝らしたほか、この豪華絢爛なお花見が桜を見ながら宴会を楽しむというスタイルへと変化したそうです。

装がなくなり文化が花開いた江戸時代にお花見も庶民に広く浸透するようになります。現在もお花見スポットとして有名な浅草(隅田川堤)や根・烏山の桜は、江戸幕府8代将軍徳川吉宗が植えたもの。政治を取り締まる一方で、花見を奨励することで庶民の心をつかんだといわれています。

ちなみに、三色の団子が串に刺さった「花見団子」が食べられるようになったのも江戸時代から。ピンク色の「桜」で春を、白色の「雪」で冬を、緑色の「ヨモギ」で夏を表現したこの団子。

秋はないので「飽きずに」食べられるなんていう洒落も利いているのも江戸らしい...?

